

# 日本川崎病研究センターニュースレター

(No. 45) 2023. 1. 1

発行：特定非営利活動法人 日本川崎病研究センター

兎年の年頭に当たりご挨拶申し上げます

今田義夫

会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。

いつも、当センターの設立目的である川崎病の原因究明に少しでも近づけるように全力を注ぎたいと思います。引き続きよろしくお願ひ申し上げます。

さて、昨年も残念ながら、コロナ渦は収束することなく、子どもたちのマスク姿も当たり前の日常となってしまいました。今年こそ、マスクなしの子どもたちの元気な声が当たり前の日常が戻ってくることを祈っています。

このニュースレターも 45 回を数えることになりました。本号では、当センター顧問の加藤裕久先生に素晴らしい原稿を頂きました。皆様ご存じのように、先生はこの 50 年を超える長きにわたり、川崎病の研究を続けられ、現在に至るまで多くの業績を上げてこられました。特に冠動脈造影での冠動脈瘤の regression の存在とそのメカニズムを初めて証明されました。川崎先生が日赤の医局勉強会でこの先生の業績をとりあげられ、「うちの医局でも誰かこのような素晴らしい研究ができる者はいないのか」と我々若い医師にハッパをかけられたのを懐かしく思い出します。今回戴いた原稿からは、加藤先生の川崎病に対する強い情熱が伝わり、特に、若い研究者へ大きな刺激になるに違いありません。加藤先生有り難うございました。

また、昨年9月30日～10月1日に当センター松原知代福理事長が会長として、第42回日本川崎病学会・学術集会在、「新たな時代へ、鍵はダイバーシティ」と題して開催され盛会裏に終了しました。この困難な社会状況の中での松原会長をはじめ、学会関係者のご努力に敬意を表したいと思います。

11月19日には「川崎病勉強会2022-川崎病の病因と発症機構 アップデート-」と題して高橋啓理事により勉強会が当研究センター主催として、東邦大学医療センター大橋病院を会場として、そして、Webによるハイブリッドでの開催がなされました。従前から不定期に行っていた勉強会をさらに充実させ、1. 基礎編 2. 臨床編 3. 特別講演の構成で素晴らしい勉強会が開催されました。ハイブリッド開催のメリットを最大限生かし、多くの参加者が一体となり、現在、原因究明に関することを主に、各々の立場から有意義な議論がなされました。これも、東邦大学医療センター大橋病院病理診断科の皆様のご尽力のおかげと感謝いたします。また、素晴らしい会場を提供いただいた東邦大学に深謝いたします。この勉強会が定例開催され、少しでも原因究明へ近づくことを期待しています。

最後に、当研究センターでは本年も疫学的研究をはじめ、川崎病に関する相談事業、国際共同研究、公募(委託)研究、学会開催支援など実施していきたいと思ひます。

(当センター理事長)

この50年間の川崎病研究は exciting だった；第一回 “Tomisaku Kawasaki Memorial Lecture” を受賞して。

#### 加藤裕久

国際川崎病シンポジウムもコロナで Zoom 開催でしたが川崎富作先生の追悼も世界中から行われ盛会でした。その際、私は第1回の “Tomisaku Kawasaki Memorial Lecture” に指名され大変名誉なことでした。この50年間の川崎病研究を振り返って昔話を思い出すままに述べてみたいと思います。

私が川崎病らしい患者さんに遭遇したのは九州大学小児科に在籍中で1960年後半の頃です。まだ川崎先生の発表の少し前でした。九大小児科では症例検討会も開かれ、診断もつかずに“あの病気”とか“例の患者さん”などと呼んでいました。1967年頃でしたか日本小児科学会で川崎先生が発表され、例の病気はこれだったのだと納得しました。

トロント小児病院での留学を終えて1970年に帰学しましたが、その頃この病気の突然死が10例発表され医学会、マスコミでも大きな問題となっていました。何しろ乳幼児が心筋梗塞で死亡するという今まで経験しなかったことが起こったからです。私は1972年に久留米大学に移り、すぐにこの研究がスタートしました。何しろ予後良好とみられたこの疾患で突然死

がみられ、しかも乳幼児に心筋梗塞という、小児科医には診たこともない事を引き起こす病気と大きなショックであり、社会的にも大きな問題となりました。

1973年、熱が2週間つづいた6ヶ月の男児を経験し、冠動脈のことも頭にあったので冠動脈の造影をしようと考えました。まだ心断層エコーなど無い頃です。その結果は驚くものでした。左右の冠動脈が拡張し一部に動脈瘤と思われる所見が見られ、普通の経過で元気になった患児にも冠動脈の異常があることが分かった最初の例であり、小児循環器学会で供覧したら期せずして聴衆からウオーという声があがりました。すぐに J. Pediatrics に投稿したところ、editor から exiting な論文だと返事をもらい、川崎先生の Pediatrics の論文の出た翌年に出版されました。別冊請求が世界中から舞い込み400通を越えました (Kato: J Pediatr 1975)。さらに冠動脈瘤をもった患児をフォローしましたが、皆元気で心電図にも変化がなく、疑問に思い再度造影検査を思い立ちました。瘤のあった患児を6ヶ月後に再検査をしてみたら、なんと多発性の冠動脈瘤がすべて消えて造影所見が正常化していました。その時の驚きは私の今までの研究生活でもっとも大きいものでした。研究班会議で報告したら「動脈瘤が良くなるなんてありえない」とこっぴどく叩かれました。ただ川崎先生だけが生

命力旺盛な子供には起こりうる事かもしれない、と慰めの言葉を頂きました。それを冠動脈瘤の regression として報告したが、どのような機序で regression が起こるかを証明しなければ納得してもらえないと考え病理学的な検討をおこない、それが中膜平滑筋細胞の増殖による内膜の肥厚と血管内皮の修復によるものであることを証明しました(Sasaguri: J Pediatr 1982)。この所見は後に川崎病と動脈硬化との関連に発展していくこととなります。ノーベル賞を受賞された利根川先生はある講演の中で「研究に必要なことは常識を疑うことである」と述べていますが、まさに常識の外に新しい発見があると実感しました。これらの研究からこの病気にはまだ多くの未知の謎があると実感し川崎病研究を一生の課題にしようと決心したわけです。

その後、冠動脈異常の長期的な follow-up を(Kato: Am J Cardiol 1982, Kato: Circulation 1996) 冠動脈の機能面から(Sugimura: J Pediatr 1992, Yamakawa: J Am Coll Cardiol 1998, Iemura: Heart 2000)を報告し、川崎病の冠動脈異常が長期的に成人の動脈硬化や冠動脈疾患につながることを示しました(Kato: Lancet 1992)。また小児の弁膜症の原因として川崎病が新しい原因になること(Akagi: Am Heart J 1990)、やアスピリン療法(Kato: Pediatrics 1980)、冠動脈異常に対するカテーテル治療の有

用性(Sugimura: Circulation 1997, Kato: J Interv Cardiol 1998, Ishii: Circulation 2002)を示しました。また川崎病の成因や病態に関するアプローチも試みました(Kato: Lancet 1983, Tomita: Brit Med J 1987, Sato: J Pediatr 1993)。

1973年の川崎先生の Pediatrics の論文と私の1975年の J Pediatr の論文で虚血性心疾患の多い米国では乳幼児が心筋梗塞で死亡するという点に関心も高く、1978年にすぐに講演依頼があり、Toronto 小児病院、Johns Hopkins 大学、Cincinnati 小児病院などで “New cause of coronary artery disease in young children” と題して Grand Round の講演をして回りました。1985年には New York で国際小児循環器学会があり、川崎先生と私が特別講演に招待され、その後先生と一緒にコロンビア大学、ボストン小児病院、トロント小児病院、シカゴの小児記念病院に招待され、講演旅行をした楽しい思い出です。その後しばしばアメリカの心臓学会 (AHA,ACC) やアメリカ小児科学会に出席しましたが、その後各地の小児病院や大学から講演に招待され、川崎病を世界に知ってもらうのに貢献できた様に思います。今までは新しい知見を北米から教えて貰うことが多かったのですが、川崎病に関しては教えることができ、しかもゲスト扱いで良い気分でした。Grand Round というのは週一回、エ

キスパートの講義で朝8時から1時間ほど全スタッフ出席で行われます。45分しゃべって後15分がdiscussionですが、この15分がストレスの時間でしたが私の下手な英語を皆よく聴いてくれました。教えてみたら今までで北米、ヨーロッパ、アジア・オセオニア、南米など70ヶ所ほどに招待されました。世界の色々の大学、小児病院を見て回り、有名な先生方にもお会いできたのは勉強になりました。教室の若い人をよく同伴しましたが彼らにとっても大きな刺激になったと思います。またヨーロッパではベルサイユ宮殿や北欧の古城であった学会懇親会、ドイツ小児科学会では小児科医によるオーケストラでベルリンフィルの本拠地フィルハーモニアでのコンサートなど楽しい思い出です。

この50年、川崎病が疾患単位としてみとめられた初期の段階からこの疾患をみつめてきましたが、その間、診断、治療が進み、以前の様な恐ろしい病気という認識が無くなったのは大きな進歩であります。しかし今後の最大の問題は原因がまだ不明であり、若いエネルギーでこの問題にチャレンジしてもらいたと思います。若い人に「Creative mind, Challenging spirit, International sense」という言葉を送りたいと思います。

(久留米大学名誉教授、  
日本川崎病研究センター顧問)

## 『川崎病勉強会 2022』を開催して

高橋 啓

2022年11月19日(土)『川崎病勉強会 2022 — 川崎病の病因と発症機構アップデート —』が開催されました。本会は特定非営利活動法人日本川崎病研究センター(今田義夫理事長)主催のもと、川崎病の子供をもつ親の会(浅井幸子代表)と厚労科研難治性血管炎の医療水準・患者QOL向上に資する研究班(針谷正祥班長)の後援を得て、東邦大学医療センター大橋病院の臨床講堂とZoomミーティングによるハイブリッド方式で開催されました。日本川崎病研究センターにとってこのような形式の勉強会を計画するのは初めての試みであり、まず川崎病勉強会2022の焦点をどこにあてるかを検討しました。本センターの大切な使命の一つは川崎病の原因究明であることから今回の勉強会の目的を「川崎病についていまだに明らかでない病因と様々な仮説が提唱されている川崎病発症機構研究の最先端を学ぶこと」としました。そして、本テーマに関心のある方々に広く参加を呼びかけ、発表者には専門性に偏り過ぎることなく専門外や医療従事者でない者にも理解しやすい話をして戴きたいと依頼しました。

日本川崎病学会、川崎病の子供をもつ親の会、そして難治性血管炎班などの協力を得て通知した結果、事前参加登録は167名におよび、医療従事者だけでなく親の会の会員や川崎病患者さんが身近におられる方々が多数参加くださり、現地にも演者、川崎病研究センターの皆様、そして親の会会員の方々など25名ほどが足をお運びくださいました。

勉強会は2つの特別講演と12の講演からなり、特別講演1にはCedars Sinai

Medical Center の Moshe Ardit 先生による「Kawasaki disease: pathophysiology and insights from mouse models」、特別講演 2 には国立成育医療研究センター研究所の阿部 淳先生による「病因仮説のこれまでとこれから」についてお話し戴きました。講演は基礎研究と臨床研究とに分け、様々な領域でなされた研究成果から想定される川崎病の病因、病態について言及して戴きました。

丸一日にわたる勉強会となりましたが、演者の皆様は発表にあたり開催方針に沿った工夫を様々にして下さり、学会とは少々雰囲気異なる集会になったと感じています。ポストアンケートでも本会の目的・開催方針を「達成した」、「ほぼ達成した」と回答くださった方は 95%におよび、自由記載欄にも判りやすかったとの評価を戴くことができ、まずはほっとしています。とはいえ、今後の課題についても多くの御指摘を戴きました。私自身も講演一つ一つについてもっとじっくり討論したかった、親の会の方々がもっと参加しやすい雰囲気を作れば良かったなどと反省しています。皆様から頂戴した御意見を基に来年以降も勉強会を継続できるよう川崎病研究センターの方々と共に努力したいと思います。川崎病勉強会 2022 の概要については川崎病研究センターのホームページに掲載を予定しています。是非、ご覧ください。

(<https://kawasaki-disease.org/>)。

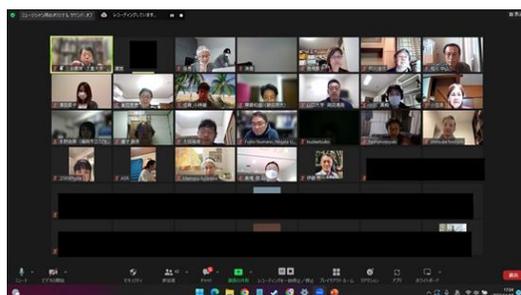
多くの皆様の御協力のおかげでこのありある勉強会を開催することができましたことに心より感謝申し上げ、報告させていただきます。

(川崎病勉強会 2022 運営事務局  
東邦大学医療センター大橋病院)

写真：現地会場参加者



写真：オンライン参加者（一部）



*Japan Kawasaki Disease Research Center*

*Japan Kawasaki Disease Research Center*

ニュースレターNo.45 をお届けいたします。  
ご意見ご感想をお寄せ下さい。

## 第 42 回日本川崎病学会・学術集会開催のご報告

松原知代

世の中は旅行や飲食などコロナ前の生活に戻っていますが、病院内は相変わらず、新型コロナ感染者の対応に苦慮している毎日です。皆様もまだまだ大変な生活を送っていらっしゃるかと存じます。さて、2022 年の第 42 回日本川崎病学会・学術集会を 2022 年 9 月 30 日金曜日～10 月 1 日土曜日で開催させていただきました。現地はソニックシティ（埼玉県さいたま市）で、LIVE 配信のみのオンラインでのハイブリッドで予定どおり開催できました。幸いに第 7 波がおさまりかけていた時期だったので現地にも多くの皆様のご参加いただきました。感染対策上広めの会場を用意したので、混雑を感じることもなくご参加いただけたのではないかと思います。久しぶりに、討論が長引いて進行が遅れるという昔の活気があった川崎病学会の雰囲気を感じられてとても懐かしかったです。会場外にでて休憩なさっている先生はどなたもいらっしゃいませんでした。やはり、ウェブでは便利さのメリットはありますが、本音がいえて熱心な討論をするには対面が重要と痛感しました。参加者総数は 344 名でした。特別講演 1 つ、シンポジウム 2 つ、共催セミナー 4 つ、一般演題 55 題、公開講座を行いました。

日本川崎病研究センターの共催で、2 日目にシンポジウム 2「冠動脈後遺症の長期管理」を行いました。演者は日本から横内幸先生（東邦大学大橋病院病理診断科）、沼野藤人先生（新潟大学）、石井奈津子先生（循環器病研究センター移植医療部）、サンディエゴ（米国）から John B Gordon 先生（San Diego Cardiac Center）と Kirsten B Dummer 先生(UCSD)をお招きして行いました。2021 年のオンラインでの国際川崎病シンポジウムの時にこの話題で盛り上がっていましたが、時間の都合で議論が途中で終わってしまっていたように思ったので、このシンポジウム開催を考えて沼野先生と須田憲治先生（久留米大学）に企画と座長をお願いした次第です。とても、有意義なディスカッションができたと思います。今後は小児科だけでなく内科の先生方にいかに興味を持ってもらうかも大事と感じました。特別講演は Jane C Burns 先生(UCSD)による「Kawasaki disease: Past, present, and future」でした。偶然にも、この日は Burns 先生のお誕生日でした。新型コロナ流行の状況でなければ、学会懇親会をして盛大にお祝いしたかったです。実は、10 月第 1 週まではコロナ対策として外国人の入国制限があったのでアメリカからも主催者の招聘手続きと VISA 取得が必要な状況でしたが、Burns 先生達が学会当日までに間に

合わないかもしれないハプニングが発生しました。Burns 先生の特別なルートとご努力で無事に予定どおり間に合いましたが、前日夜に成田空港に到着するまでは安心できない状況でした。本当に新型コロナ流行はどれだけ色々なことに影響してくるのかと思いました。結果的に無事にサンディエゴから全員予定どおり来日できました。清水智佐登先生が一般演題を發表してください、Adriana Tremoulet 先生は次回(第14回)2024年のモントリオール(予定)での国際川崎病シンポジウムの会頭のお1人で、2日目の「会員集会」でアナウンスをしていただきました(<https://www.ikds.org/> 参照してください)。一般演題は口演とポスター発表にしましたが、ポスター発表も録画を用いた短い口演を同時に行ってもらいました。すべての演題でディスカッションができて有意義だったと思います。学会終了後におこなった市民公開講座では、ライブ配信のトラブルが生じてしまい聴講できなかった参加者の方には誠に申し訳ありませんでした。講演後の相談会では「川崎病の子供をもつ親の会」の皆様の質問には心うたれるものがありました。ますます、川崎病についての診療や研究に励まなくてはという思いを強くしました。

2023年は同時期に大阪で学会が開催されます。日本川崎病学会は、川崎病という

たった一つの疾患について色々な立場で関わっている稀有な学会です。まだまだ予断のならない日々が続きますが、皆様お元気で、また学会でお会いして意見交換をしたいと存じます。

(獨協医科大学埼玉医療センター小児科)



## 事務局から

### 【センター日報】

2022年5月13日 2022年度第1回理事会開催 5:00pm～（於:当センター） Zoom 会議

2022年6月4日 2022年度総会と研究報告会開催（於:当センター） 1:00pm Zoom 会議  
各年度の事業報告及び会計報告、次年度の事業計画及び予算計画は総会議事録と共に  
当センターでいつでも閲覧できますので、お気軽にお立ち寄りください。

2022年6月4日 2022年度第2回理事会開催 総会后（於:当センター） Zoom 会議

2022年8月19日 2022年度公募研究選考委員会開催 5:00pm～（於:当センター） Zoom 会議

2022年8月19日 2022年度第3回理事会開催 5:30pm～（於:当センター） Zoom 会議

2023年3月10日 2022年度第4回理事会開催予定 5:00pm～（於:当センター） Zoom 会議

### 【特定非営利活動法人日本川崎病研究センター会員総数】 2022年12月末現在

[正会員：70名、1法人、3任意団体]：[賛助会員：99名、1法人、0任意団体]

### 【学会・研究会・国際シンポジウム】

★ 第47回近畿川崎病研究会 2023年3月4日（土）13:00～ 於：完全 Web 開催  
運営委員長:津田悦子先生（国立循環器病研究センター小児科）

★ 第43回東海川崎病研究会 2023年5月20日（土）開催予定  
代表世話人:加藤太一先生（名古屋大学小児科）

★ 第42回関東川崎病研究会 2023年6月17日（土） 於：順天堂大学保健医療学部  
または10号館(予定) 会頭: 深澤隆治先生（日本医科大学小児科）

★ 第43回日本川崎病学会 2023年9月30日～10月1日 於:国立循環器病センター  
会頭:津田悦子先生（国立循環器病研究センター小児科）

★ 予定：第14回国際川崎病シンポジウム 2024年 月 日 於：開催（カナダ）  
会頭:Najib Dahdah, MD ・ Adriana Tremoulet, MD

★ 「川崎病の子供をもつ親の会」問い合わせ先：Tel：0467-55-5257

**新会員募集にご協力ください!!!**

**正会員 年会費 20,000円**

**賛助会員 年会費 5,000円**

### 【川崎病に関するご相談】

専用アドレスを開設しました。<[kdcentersoudan@gmail.com](mailto:kdcentersoudan@gmail.com)> 担当理事が、随時返信でお答えさせていただきます。電話・Faxによるご相談はご遠慮ください。

### 【川崎病急性期カードお申込み】

専用アドレスを開設しました。<[kdcenterkdcad@gmail.com](mailto:kdcenterkdcad@gmail.com)> 主治医の先生に記入して頂き、母子手帳などと共に保存して今後にお役立てください

